

教科教育学コンソーシアム設立会議 記念シンポジウム
「教科教育学の歴史と展望を語る」



2021.3.14@Zoom

指定討論

—なぜ、教科なのか—

京都大学高等教育研究開発推進センター
日本学会第一会議員

松下 佳代

自己紹介

- 専門分野は教育方法学(特に、能力論・学習論・評価論)
 - 大学教育と初等中等教育の両方を視野に入れて、理論と実践を往還する研究



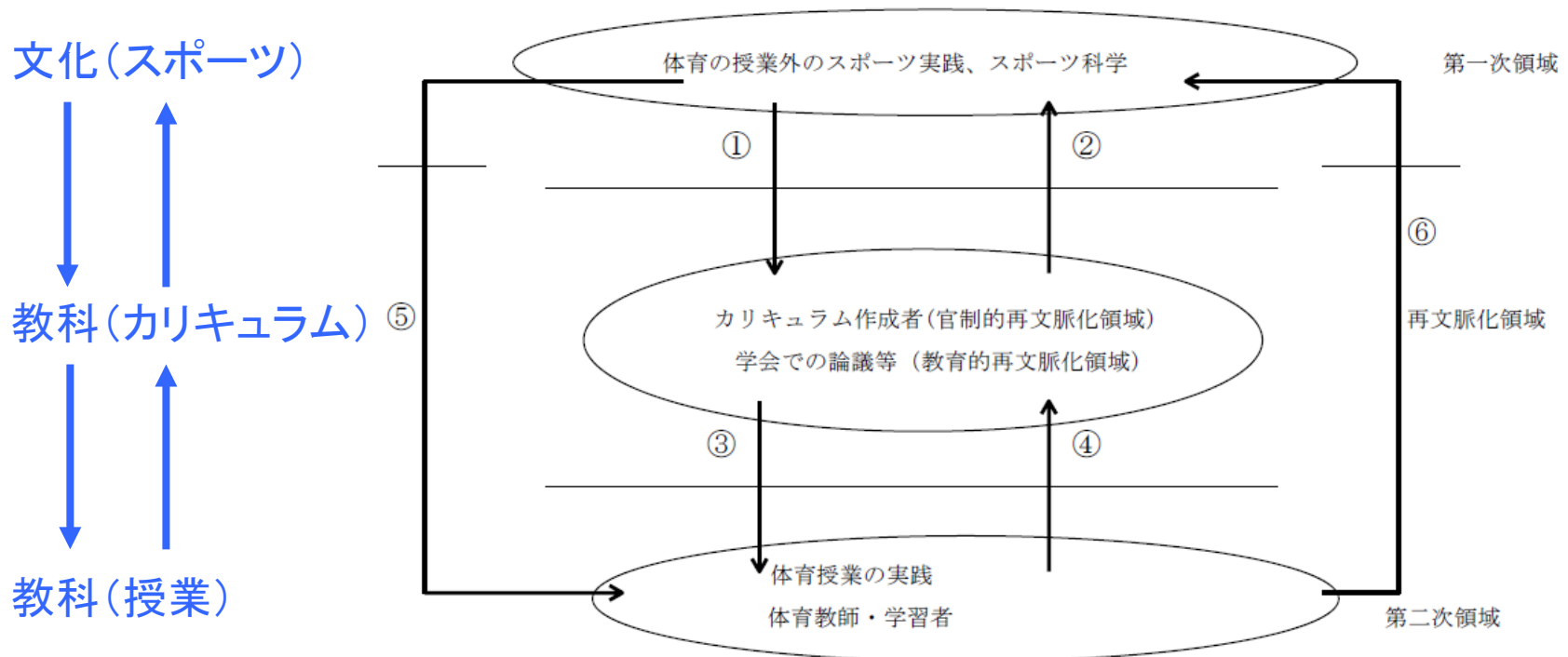
- 学術会議では
 - 第24期「教育学分野の参照基準検討分科会」の委員長
 - メンバー20名中、教科教育関係の方が5名
 - 『報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準(教育学分野)』を発売(2020年8月)



教科とは何か：岡出提案から

岡出先生資料

教科をめぐるディスコース産出のメカニズム(岡出、2021,p.31)



教科とは何か：影山提案から

教科の成立概観

※数学科の場合

影山先生資料

中学校令施行規則(1901, M34) * 教材・文化財としての学問

数学ハ数量ノ関係ヲ明ニシ計算ニ習熟セシメ
兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

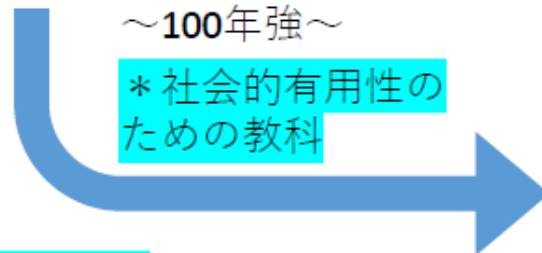


中学校教授要目(1902, M35)

算術・代数・幾何・三角法
* 学問, 外国のシステム, 富国, ~

~100年強~

* 社会的有用性の
ための教科



中学校学習指導要領(2017, H29)

数と式・図形・関数・デー
タの活用

* 資質・能力育成の有効な
機会としての教科

教科と資質・能力
の関係は？

* 学問から教科への転置

目的論
教育的視野を備えた内容の体系化
固有の見方・考え方

文化—教科—学力

● 文化

- 「芸術や文学だけでなく、生活様式、共同生活の方法、価値観、伝統、信念などを含む、社会や社会集団の精神的・物質的・知的・情緒的な特徴の集合体」(Council of Europe, 2018, p. 70)
- 一種の外化された遺伝情報
 - 人間は「生理的早産」の状態で生まれてくるので、教育という助成的介入を通して、**一種の外化された遺伝情報である文化**(学問・芸術・身体文化など)を内化することで、ようやく自立することができる(中内, 1988)

● 教科 (≠subject)

- 「小, 中, 高の諸学校で, 児童, 生徒が学習すべき文化遺産としての知識, 技能を, 教育的観点から系統的に組織した一定の区分または領域」(ブリタニカ国際大百科事典)

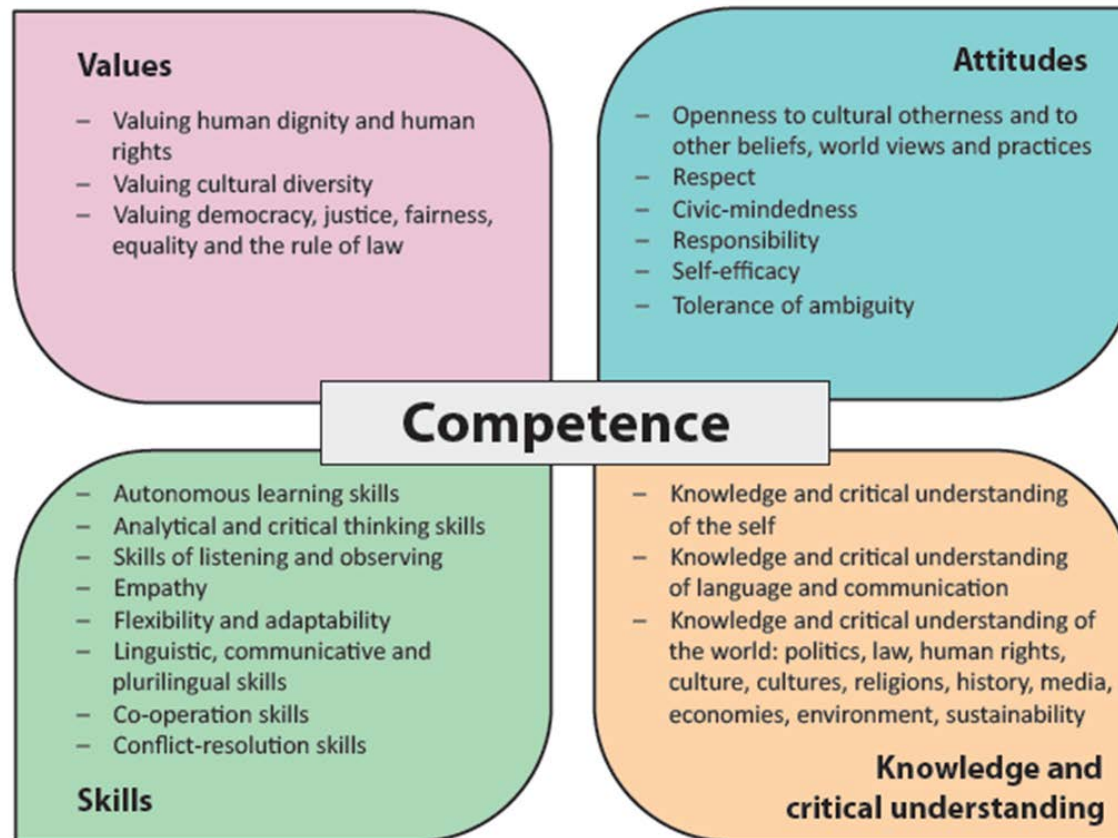
● 学力

- 「人間の知的能力全体のうち、教育的関係のもとで教材を介してわかち伝えられる部分」(中内, 1988)であって、主に**教科の学習**を通じて形成される

教科と資質・能力の関係は？

● そもそも、資質・能力をどう捉えるか(その1)

Figure 1: The 20 competences included in the competence model



(Council of Europe, 2018, p. 38)

■ コンピテンス(competence)
 …所与の文脈の中で、**要求、課題、機会**に適切かつ効果的に対応するために、関連する価値観、態度、スキル、知識・理解を結集し、展開する能力

■ 下位コンピテンス(competences)
 …有能な(competent)行動を生み出す際に結集され展開される特定の個人のリソース(すなわち、特定の価値観、態度、スキル、知識・理解)

(p. 70)

● そもそも、資質・能力をどう捉えるか(その2)



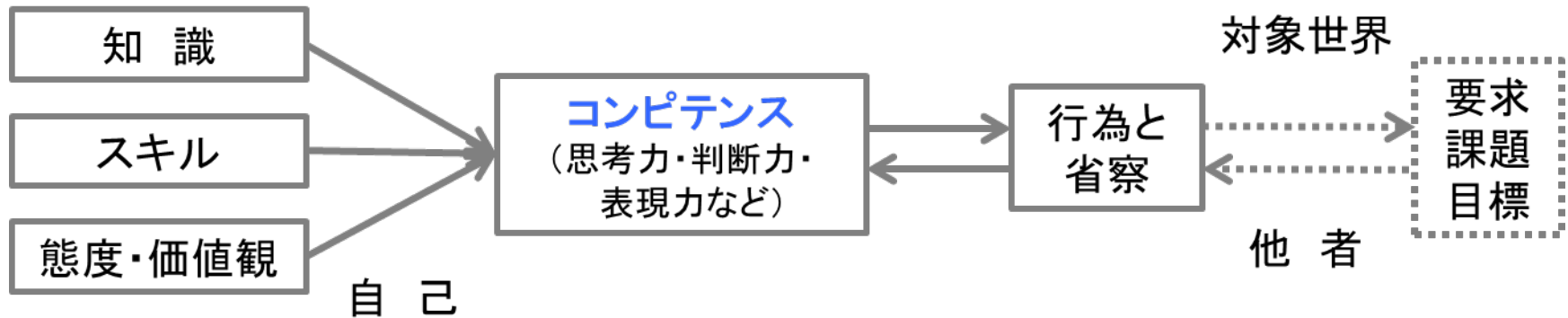
(OECD, 2016, p. 2)

■ コンピテンス (competence/competencies)

…世界に関わり世界で行動するために、知識、スキル、態度・価値観を、学習のプロセスに対する省察的なアプローチにそって結集する能力

● そもそも、資質・能力をどう捉えるか(その3)

● 「資質・能力の三重モデル」(cf. 松下, 2019)



■ このモデルでは、①資質・能力を構成する個人の内的リソースを「知識」「スキル」「態度・価値観」とし、②**コンピテンス**を〈ある要求・課題・目標に対して、内的リソースを**結集**させつつ、対象世界や他者と関わりながら、行為し省察する能力〉として捉える。

■ このモデルは、これまでの資質・能力論における**3種類のtriad**(三つ組)を包含する(「三重モデル」という名称はそこから来ている)。まず、従来のKSAモデルは、知識、スキル、態度・価値観の**3つの要素**の中に組み込まれている。また、コンピテンスを対象世界との関係、他者との関係、自己との関係という**3つの関係性**によって捉え、その中心に省察性を置くというOECD-DeSeCoのキー・コンピテンス概念は、このモデルのコンピテンスの中に引き継がれている。さらに、基礎力・思考力・実践力という**3つの層**からなる国立教育政策研究所(2016)の「21世紀型能力」は、このモデルに内在する**3つの層**(知識・スキルなどの層、コンピテンスの層、行為と省察の層)にほぼ対応すると考えられる。逆にいえば、従来の資質・能力モデルは、このモデルに表現された重層的な資質・能力のある一面を切り取って論じていたとみなすことができる。(pp.13f、一部改変)

学力と資質・能力①:

＜過去から現在へ＞と＜未来から現在へ＞

● 学力

- 蓄積されてきた文化を、社会のメンバーとなるべき子ども・若者にどう伝達継承するか？
→＜過去から現在へ＞の方向性

● 資質・能力

- これからの社会がどうなるか・どうあるべきか、そのために必要な力はどんなものか？
(例)「民主主義文化」のためのコンピテンス
2030年に向けたコンピテンス
→＜未来から現在へ＞の方向性

学力と資質・能力②:

<境界設定>と<境界横断>

● 学力

- 主に、文化の特定のまとまりを組織化してつくられた教科の学習を通じて形成される
- ➔教科という境界の中で形成される能力

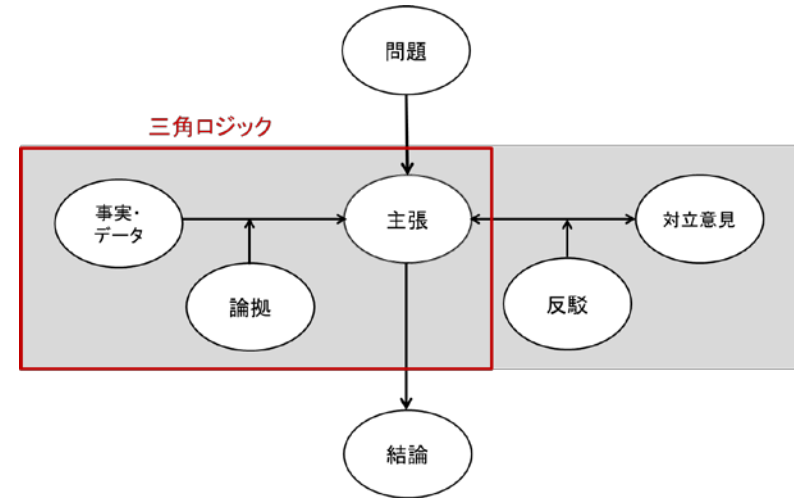
● 資質・能力

- 教科の中だけでなく、教科横断的に、また教科外でも育成されるものであり、さらに、学校段階の違いを越え、学校と社会をつなぎ、生涯にわたって形成される
- ➔教科間の境界や学校と学校外・学校後の間の境界を横断し崩していく働き

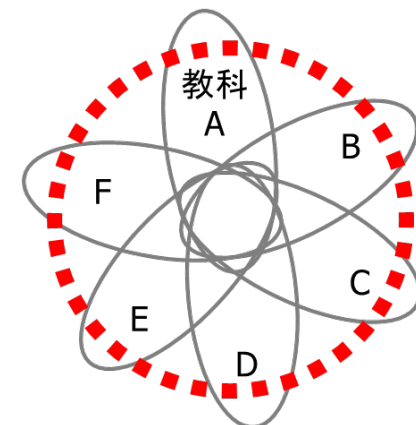
では、このような資質・能力の育成において、教科はどのような役割を果たしうるのか？

教科教育学、本コンソーシアムへの期待

- 教科＝「competencesの束」
 - それぞれの教科は、固有の知識・理解、スキル、態度・価値観の束
 - ある状況での課題に対応するためには、さまざまな「competencesの束」による多様なアプローチが必要
 - 各教科の固有の特徴を把握した上で、それらを結集することが不可欠
 - ➔ その教科らしい知識・理解、スキル、態度・価値観とはどんなものを生徒たちが実感できるような取組を
 - ➔ そのためには、教科の枠を超えて教科の特徴を俯瞰的に捉えることが必要
- ＝教科教育学コンソーシアムへの期待



対話型論証モデル(松下, 2021)



IB-DPのTOK(知の理論)